



戦後七十周年記念誌

―戦争の記憶と平和への祈り―

みどり市



戦後七十周年記念誌の発刊にあたって

戦後七十年にあたり、改めて戦争の犠牲になられたすべての方々に哀悼の誠を捧げますとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

先の大戦が終結してから七十回目の夏を迎えましたが、その間、犠牲となられた方やその家族が被った苦しみが薄れることは決してなかったと思います。一方で、戦後に生まれた世代が人口の八割を超え、社会全体の中で戦争の記憶は確実に薄れつつあります。

私自身、戦後に生まれた世代ですが、戦争を体験した方の証言や当時の状況を記録した映像などの資料から戦争の悲惨さを伝え知り、二度と戦争の惨禍を繰り返してはならないと強く感じています。そして、戦後七十年という節目の年を迎え、次の世代に戦争の記憶をきちんと伝え、戦争の恐ろしさと平和の尊さについて考える資料を残していくことは、今を生きる私たちに課せられた責務であるとの思いから、この「戦後七十周年記念誌」を発刊することになりました。

本書は、戦争を体験した方や戦争で家族を亡くされた方に、その体験談を寄稿していただいて作成しました。ここには、戦争を経験した方々が長年抱えてきた苦しみ、そして平和を願う強い思いが綴られています。寄稿していただいた方々には、悲しい体験を文字にすることで改めてつらい気持ちを思い起こさせてしまったかもしれませんが、戦争を体験しその悲惨さを直接知る方が、若い世代へその記憶を語り継ぐ貴重な資料となると信じております。本記念誌の発刊にあたっては、みどり市遺族の会の方々に多大なるご協力をいただきました。ご協力いただきました皆様に敬意を表し、心から感謝を申し上げます。この記念誌を一人でも多くの方にご覧いただき、平和について考えるきっかけにいただければと思います。そして、すべての人の努力により人類共通の願いである恒久平和が実現されるよう切に願ってやみません。

二〇一五年 八月

みどり市長 石原 条

戦後七十周年記念誌の発刊によせて

戦争の記憶を風化させないために・・・

戦後七十年が経過し、日本は戦後の混乱期から高度経済成長期を経て、安全で豊かな国へと成長しました。戦時中あるいは戦後間もない混乱期を経験していない世代が大半を占めています。不戦の誓いは受け継がれ、平和が保たれています。また、核被爆国として非核三原則を掲げ、世界に向けて核兵器の悲惨さや脅威について訴えると共に、核の無い世界の実現を願っています。

日本もかつては戦争を経験し、多くの尊い命が失われ、遺族の方々にとって当時の記憶は辛い記憶として深く心に刻まれており、これからも消えることはないでしょう。しかし、世界では未だ多くの紛争やテロ行為等が絶えず行われており、現在も多くの尊い命が犠牲になって、人々の心に深い傷を残す悲惨な行為が続いています。また、核兵器廃絶と恒久平和実現の願いもむなしく核実験が繰り返されており、未だ核の脅威にさらされています。

日本は終戦から七十年という長い時間が経過していますが、今日まで戦争を行うことなく平和が維持されているのも、私たちが戦争を二度と繰り返してはいけなと願い、戦争の記憶を風化させないよう語り継いできたからこそであります。これからも戦争の悲惨さや平和への思いを後世に繋いでいかなければなりません。

最後になりますが、この冊子は、戦没者遺族の方々が当時を振り返り、生活の様子や生活上の苦悩等についてお寄せいただいたものが綴られております。当時の様子を伺うことができる機会が少なくなってきた今、本書を一人でも多くの方に読んでいただき、戦争の悲惨さと平和の大切さ、さらには命の尊さを伝える資料として受け継がれていくことを願っています。

二〇一五年 八月

みどり市社会福祉協議会 会長 木暮 勝利

戦争の惨禍を繰り返さないために

先の大戦が終結してから七十年の歳月が経ちました。苛烈な戦いの中で、あるいは故郷より遠く離れた異国の地で、残してきた家族の行く末を案じつつ亡くなっていった戦没者の無念さはいかばかりであったかと考える度に、今でも胸が張り裂けそうになります。

時の経過とともに、私たち戦没者遺族の数は年々減り続け、残った者の高齢化も顕著であり、戦争の目撃者である私たちがその恐ろしさを直接次の世代に伝えるのに残された時間は決して多くはありません。戦争終結から七十年という節目を迎えた今年、みどり市より「戦後七十周年記念誌」が刊行されることになりました。私たち戦没者遺族にとっても、身近に体験することとなった戦争という悲惨な出来事を将来へ語り継げる貴重な機会であり、戦争体験談についてできる限り寄稿させていただきました。肉親を失った悲しみや戦後の苦労、平和への願いなど、それぞれが心の奥底に抱いてきた思いを素直なままに書かせていただきましたので、少々読みにくい表現もあるかと思いますがご容赦いただけると幸いです。

今、私たちが享受している平和と繁栄は、多くの方の尊い犠牲を礎にして成り立っていることを決して忘れてはなりません。戦争とはいかに恐ろしいものであるか、平和とはいかに尊いものであるか。戦争という悲劇を経験した私たちだからこそ、誰よりも強い思いがあります。再びあのような戦禍を繰り返さないためにも、戦争の記憶を風化させることなく次の世代へ継承し、平和な社会の実現に寄与していくことが私たちに課せられた使命です。この記念誌をお読みいただくことが、戦争と平和について今一度考える機会となり、恒久平和実現の一助となることを心より願っております。

二〇一五年 八月

みどり市遺族の会 会長 毛塚 庫二

目次

戦後七十周年記念誌の発刊にあたって

みどり市長 石原 条

戦争の記憶を風化させないために・・・

みどり市社会福祉協議会 会長 木暮 勝利

戦争の惨禍を繰り返さないために

みどり市遺族の会 会長 毛塚 庫二

「木洩れ日」

中島 はま / 大間々 1

父・母を想う

入戸野 善久 / 笠懸 6

戦争の思い出

野澤 アキ / 東 9

私と戦争

浅川 まさ / 大間々 12

戦後七十年を期して

深澤 富四郎 / 大間々 15

父母に誓う平和よ寒昂

高橋 靖代 / 笠懸 20

汽車を追いかけた母

石坂 勉 / 笠懸 22

「母の苦勞」

私と戦争

父さんと呼べずに過ぎた七十年

終戦七十年を迎えて思うこと

想ひ出

ビルマで戦死した兄、一夫

戦争を繰り返さないで

七十年の回顧

戦争中の思いで

私と戦争（兄を悼む）

「父よ、母よ」

兄の思い出

今泉 眞澄 ／ 大間々

池崎 悦夫 ／ 笠懸

川島 清美 ／ 笠懸

今泉 清 ／ 大間々

大澤 三郎 ／ 笠懸

毛塚 庫二 ／ 東

阿部 和子 ／ 笠懸

本間 岑太郎 ／ 笠懸

根岸 英二 ／ 東

関口 定夫 ／ 笠懸

二渡 努 ／ 大間々

大矢 正 ／ 笠懸

24

26

28

30

35

36

39

40

44

49

55

60

戦争体験記

「木洩れ日」

みどり市遺族の会大間々支部 中島 はま

戦没者 中島一の妻

「手を合す夫の遺影の若きまま 今日五十回忌の法要をなす」

古希にして短歌を教えていただき、十年たちて「木洩れ日」という歌集が出来ました。やっと征きし夫 はじめ一の若き写真を手元に飾ることが出来たときです。

「靖国の杜静かなり深緑の 木洩れ日に光る白き鳩あまた」

このたび、遺族会七十周年に当たり、夫のこと、子や孫、曾孫、友人、旅行、沢山の思い出と、苦難のあと、私の貴重な体験を思い返しながら拙いその一首一首にて、私の七十年を綴らせていただきます。

「師の歌集めぐりて懐し吾を詠める ことの多きに涙湧きくる」

昭和十六年夫と結婚しその時の仲人であり歌人の中沢豊三郎氏の歌誌「朔風」に

「いたつきの身をたどり来し上海に 船待ちかねて逝きし君はも」

「敗戦のそのたまゆらも君還る よろこびをもておほひしものを」

「花の頃はかならず来むと待ちわびし その花の日に君は逝きにし」

戦争の不条理、くやしき、せつなき、何処へ行き、何を見、何を食べても浮かぶ姿です。

「切々たる思いを綴る家族への 心のこせる長き巻紙」

「還らざる夫の教えしオリオンの 三星肩に果てて久しく」

「上海にて戦に逝きし夫何処 まぼろし追うて家族と尋ぬ」

路頭に迷いつつ生きる道を考えました。

「手を合わすみ灯炎に浮かびくる 夫の幻影一瞬に消ゆ」

「逝きたりし夫を不憫に思へども 吾も辛かりし五十年長し」

「漸くにわずかに伸びたる麦踏みつつ こらえることの多かりし身ぞ」

遺族会皆様にささえられ今九十二才になりました。

「五十度めぐりて桜咲く岡の辺の 慰霊碑に捧ぐ夫の忌の日に」

「靖国の御社に集う妻我等 心一つに平和祈りぬ」

「追悼式の黙祷しつつと浮ぶ 逝きたる夫の生まれし日今日は」

五十年経て、平和な世、本当に大事に大事に思われます。

「去年も無事今年もひたに希いつつ 床の間の軸「無事」を掛けたり」

「宝とも思いて夫の形見なる子や孫と 共に日々を暮らしぬ」

「初詣で参道の店に立ち寄りて 曾孫の記念樹嫁と選びぬ」

仕事を離れ、お茶にお花に書道、大正琴と趣味を楽しみ仲間がたくさんになりました。

「ゆくりなく湯気の立ちたり初釜の お手前の手に束の間よぎる。」

「孫嫁に貰いし筆もて清書する 運びなめらかに今日の出来ばえ」

「大正琴演奏の音もさわやかに 八十路の吾は表彰を受く」

世界中多くの旅行をいたしました。その中でも八十才にて家族とおとづれし、夫の逝し所上海の旅は一番心

に残るものでした。

「風渡る川辺の柳江村橋に 佇みて聴く寒山寺の鐘」

「無錫の道に芙蓉の花は揺れており 「君の待つ窓」の歌しのぼるる」

「喫茶去」の軸寒山寺にて求めたり 友呼び思い出茶席に語る」

毎日が孫、曾孫、家族と幸福に過ごせるこの日本は素晴らしいです。頑張りは続いています。

「ペンギンの歩みに似たる曾孫の 得意顔なる後を追いく」

「電話の向こう「四つ寝たら行くからね」 曾孫の声に日々の待たるる」

「生まれたる弟を抱きしめほおずりの しぐさ愛しき我が曾孫たち」

「味加減教わりながら野菜刻む 嫁入り近き孫の後姿」

「嫁の留守に孫と厨に立つタベ 今宵は私の好みに合わす」

「犬連れる嫁と散歩のひい孫は おぼつかぬ足で喜々と追いく」

平穏な日々がつづくとなんの記憶は居眠りをはじめると言います。私は今歌集を読み返し、絶対に忘れては

ならない七十年前をそして戦争をと、平和への願い新たです。

「二百五十万戦没者の志にこたえつつ 黙祷捧ぐ決意新たに」

「極まれる空の青さに映りたる 群馬の塔は輝きを増す」

「六十年み霊まもりて参拝の 靖国の妻杖をたよりぬ」

「真実を知らされずして「侵略」の 言葉を戦死せし夫はなげくや」

「公式参拝未だならざる御社は 夫らに思いよせつつ額づく」

「一点を見つめてしばし空虚なる 視野につがいの蝶の舞いつつ」

改めて遺族会の皆様に感謝申し上げます。平和の本当のありがたさを知るのは私達です。戦争の無い世が永久にと、子や孫、曾孫へと伝えるのも私達です。

絶対に戦争は、あつてはいけないのです。

「物陰に大輪の牡丹かがやけり 白きが位置のたしかさ知らず」

父・母を想う

みどり市遺族の会笠懸支部 入戸野 善久

戦没者 入戸野茂の子

平成二十七年も、二ヶ月目に入りました。大正六年（一九一七年）三月四日に生まれた母は、もうすぐ九十歳になります。一年ほど前は、一緒に生活していましたが、骨折で入院し、その後は介護施設にお世話になっています。入所後また骨折で入退院し、その後体調が勝れず、現在は病院に居ます。

昨年末、仏壇まわりの整理をしていたら、父（戦病死）が家族に宛てた手紙十三通を見つけました。初めて目にするものでした。ほとんどが、満州^{注1}からの絵はがきです。私たち子供宛のものは、中国の童たちが楽器を奏でているもので、文面は「おばあさん、お母さんの言う事を良く聞いているので、ご褒美にエホンを送りました。お母様に読んで戴きなさい・・・」と書いてありました。当時、三才位だった私には、父の姿も記憶に乏しく、思い出もほとんどありませんが、こういう手紙に接すると父親を感じます。戦況の様子は、どの手紙

にも書いてありません。そして、言うまでもなく「軍事郵便」^{注2}「検閲済」^{注3}の朱印が押されています。

父は、終戦の一年前、昭和十九年十一月に本土に帰る船の中で集団赤痢^{注4}で亡くなったと聞いています。日本本土を踏めるのを心待ちにしていた父、そして母はもちろん、息子の帰りを待ちわびていた祖母も、どんなにか無念だったことか。

戦後、母は猛勉強の末、県職に就き、三人の子供・姑と生きてきました。家事は、祖母の仕事の样でした。食糧難の続くこの時期、育ち盛りの子供三人を養うのは、並大抵の事ではなかったと思います。まだ小学校入学前、母や祖母の着物を入れたリュックを背負い、桐生駅から汽車に乗り、国定駅近くの遠縁の農家に手伝いに行き、カボチャや麦などをリュックに入れてもらって帰って来たのも何回ありました。米をいただくのは稀でした。カボチャ料理は今でもあまり箸が進みません。

終戦直後、女性が外で働くことはまだ「特別」だったかと思います。周りでも、母親は大体家に居ました。私を含め、子供三人を大学まで進学させ、隣近所や親戚付き合いもし、いろいろ苦労も多かった事と思います。

今、世界では、イスラム国関連、ウクライナ、アフリカ等の戦いの様子が連日ニュースになっています。そ

して多くの罪のない人が理不尽にも命を奪われています。人一人の周りには、家族はもちろん多くの知人が居ます。

人間の叡智^{注5}で、少しずつでも悲しむ人、苦しむ人の減ることを願ってやみません。

戦争の思い出

みどり市遺族の会東支部 野澤 アキ

戦没者 野澤金作の妻

野澤金作大正三年三月二十五日（金）出生。

結婚後まもなく一月二十日に東京へ出る。

十六歳から梶川建具店にまたお世話になる。

金作は大東亜戦争^{注6}に昭和十六年七月二十四日に召集令状を受け八月二日に入隊、秘密隊^{注7}で送り出す時は門までしかいってはいけないと言われ、風呂敷一枚で隣のおじさんが一人で駅まで送ってくれた。

子供が生まれるのもわからないまま戦死してしまった。

昭和十七年三月十七日に長男が生まれた。

知らせたのはお宮参りの写真、その返事がきたので良一と名前も付けたのも知らせることが出来た。

誕生日の写真を送ったときは、返事は来なかった。十八年の三月三日に戦死の公報が入った。

ニューギニアの島間のダンビル海峡で亡くなった。

亡くなってから何度子供と死のうとしたが……

兄の家で子供と二人で農業の手伝いをしながら大変お世話になった。

金作の弟子であり戦争でも戦友だった功さんが東京から帰ってきた。親戚の皆さんにお世話になり、功さんと再婚した。また二人の子供が生まれ五人で小さな家を借り、建具屋も始めた。食べ物を買うのも大変で建具屋も手伝ったり、農家を手伝ったり、家計を切り盛りした。

義兄に今の場所を提供してもらい現在になりました。

現在九十四歳となり何とか家族や周りの人にお世話になり生きてます。



私と戦争

みどり市遺族の会大間々支部 浅川 まさ

戦没者 浅川元治の妻

「おれも赤紙^{注8}が来て行くけど、おふくろと子供はおれに代わって頼むよ」

昭和十七年七月、夫（元治^{もとはる}さん）は高崎三八部隊に入隊しました。結婚して1年半、夫がかぞえ二十六、わたしが二十四、娘のかつ子は生まれてまだ半年でした。

夫の弟栄二がニューギニアで戦死という公報が入りました。そのお骨を迎えて間もなく、夫もニューギニアへたちました。

それから音信不通のまま何年かたち娘も学校へあがるようになりました。

二十三年の夏、戦死の公報が入り、親せきの人と一緒に高崎へ遺骨をもらいに行きました。小さい四角の木の箱に、戒名を書いた紙きれだけが入っていました。

公報が入っても、死んだとはどうしても思えなくて、毎日陰膳^{注9}をして「お父さん、初物だよ。わたしも食べさせてもらうからね」と、一緒に食べたりしていました。

おばあさんも本当に泣きぬきましたよ。九十歳で亡くなるまで「栄二が帰ってくる…。どちらか一人ぐらい帰ってくるだろう」と言い続けていました。

中国から孤児が来るのをテレビで見ていると、その中に夫が交じってくるのではないか——なんて夢見たりしてしまうんです。何十年たっても、二十五、六歳のときの夫しか覚えていないもんですから…。

人間として夫婦になった以上は、共に白髪が生えるまで一緒にいられることが幸せです。

これからの人には、戦争に巻き込まれるようなことはしてもらいたくない、起こしてもらいたくないと、重ねて訴えたいです。

夫から来た二通の手紙——これがわたしの宝物です。この手紙に支えられてきました。

何が何でもこの子だけは守り抜かなければ、と思って頑張りました。ありがたいことに、どこへ行っても人の温かい言葉に救われ、育てられてきました。人様のぬくもりは、最高にいただきました。

「お父さん、きょうも一日守っておくれ」と、今でも毎朝手を合わせます。夜は「お父さん、ありがとうね」と言って寝るんです。

今の楽しみは、花を植えたり、作ったりすることです。花が一番好きですね。

（広報おおま 昭和六十年 五月号 掲載）

「戦争のことを語るのは嫌い」

「もうあんな思いはオレ達だけでたくさんだ」

だから私達家族も戦争のこと実はあまりよく知りません。今回旅の支度をしていたところ、昔の写真と共に部屋のタンスの上にそっとおいてありました。皆様にもご一読頂けたらきつと喜んでもらえる気がします。

（浅川家族一同）

戦後七十年を期して

みどり市遺族の会大間々支部 深澤 富四郎

戦没者 深澤郡司の弟

私は昭和十九年二月一日現役兵として入営した。内地三ヶ月の訓練を受け、満州国境守備隊に特属勤務につく。太平洋戦争も日本が負けると決定していた様な状況の中で昭和二十年八月九日ソ連は不可侵条約^{注10}を破棄して侵入してきた。ソ軍は戦斗部隊であつた。わが軍は小銃で兵器の差が大きく肉弾戦となつて多くの犠牲を出した。我が中隊は部隊後衛の任を受けて部隊の整理してからの出発である。情報は何一つ知ることの出来ない孤立した中隊となつてしまった。一日も早く上級部隊に合流して反撃せねばならぬ、時々敵軍と遭遇して合戦したが兵器の差が多く撤退した。戦死者、不明者も出た。下級指揮官として兵員を少なくしない様、懸命に頑張った。関東軍の上級指揮官はなにしているのか、終戦も知らず満州の広野をソ軍の占領下をさまよい歩いた。十一月の末頃ソ軍の戦車部隊に包囲されソ軍の軍使に依つて終戦を知った。皆を東京に帰す為、迎えに

来たと言われ武装解除を受けた。牡丹江^{注1}に集結して二週間が過ぎた頃日本へ帰ると言われ汽車に乘せられた。ところが嘘をつかれシベリアに連れて行かれてしまった。今までの疲れと栄養失調、伝染病で病人続出した。病人は次から次へと死んで行つた。薬があれば皆治るのに、残念でたまらない。自分もその頃高熱を出して入院してしまった。幾時になつても熱が下がらない。今日死ぬ明日死ぬかの日々が何十日も続いた。奇跡的に熱が下がって元気になった。二十一年六月頃退院を命ぜられた。退院すればすぐに作業である。働かざる者は食うべからず。共産主義の原則である。弱者を集めて軽作業である。一か月もすると重労働である。三十人四十人の長とされ伐採、道路建設、建築、大工、土木作業、鉄道の建設作業なんでもさせられた。ずぶの素人の作業長である、ノルマが下がるとパンが少なくなる。なんとかして三百五十グラムのパンを食べさせる為に苦勞した。こんな事を毎日やっていた。

そして昭和二十三年七月に帰国した。家に帰れば兄も私も生死不明の公報が入っていた。父母と姉三人の子供、働き手の無い家では大変な生活であつた様である。荒れた農地を見て、見ていられなく家事を手伝っていた。其の年の十一月十九日に兄の戦死の公報があつたが、なんて事か戦死してから五年も過ぎての公報であつ

た。兄の三十日祭を過ぎた頃、深澤一家の長老、深澤信太郎さんに呼ばれた。何かと思つて別室に行くと、兄の戦死した現在の状態では二百年近く続いたお前の家も潰れてしまう。年の差があるが姉と逆縁となつて家を盛り立ててくれと目に涙を浮かべて話された。あまりにも突然なので自分は驚いた。「どうしたら良いか考えさせて下さい」と言つて退室した。其の後何回かの話があつて自分がこの家を継いで再興しなくてはならないような責任感が出てきた。父母も苦勞の連続であり、父母に孝養も盡さねばならない。留守を守つた姉と子供三人も大切に育てなければならない。留守中、多くの方々に支えられて守られた家である。長年かかつても必ず返さねばならぬ。兄に代わる能力はないが、生死の中を何回も何回も生き抜いた人間である。賢い決心のもとに家を継ぐ決心をした。

昭和二十三年十二月冬至の日に深澤信太郎さんの媒酌により、組合代表、一家の代表、親戚の代表数人に集まつて頂いて口固めの宴が行われた。自分達の結婚式はこれで終わったのである。三人の子供は自分の養子とする。「富四郎二十六歳、静子二十八歳」をして農業に取り組み始めた。

農業簿記^{注2}₁を記入して経営の改善を計った。常時は米麦、養蚕、酪農、人参、葱、牛蒡、其の他野菜はな

んでもやった。耕作地は一町三反でした。夏は明るくなるのを待って畑に出た。現在の様に除草剤、農業機械の無い時代で大変苦労した。

その後敏雄と芳美が生まれ、きぬ姉の子、将盛（小学校一年生）も来て一家九人の生活が始まった。静子は子守、家事で大変であつた。農業を行う為に牛舎兼堆肥舎、家の山の木を切つて二階建ての家を作つた。その後紀美子が学校を卒業して東京へ就職した。次の年、栄一が卒業して仕事も楽になった。東京オリンピックの年に母屋の建て替えもできた。

其の五年後には大きな蚕室も出来、農業機械も入れて作業も楽になった。平成十六年には二度目の母屋の建て替えもできた。但し、其の間も不幸の連続であつた。昭和三十八年父が死亡、昭和四十六年征子死亡、昭和五十二年母が死亡、昭和五十四年栄一死亡、平成十九年静子（妻）死亡、平成二十二年敏雄死亡、なんで私の家ばかり不幸があるのだろうか。現在は、嫁と二人暮らしです。私は不幸があるたびにこの家を守る為に悲しい、淋しいなんて言っていられない。これを克服する為に夢中で頑張つた。父は不幸が有る度に強くなると子供の時言われた事もあつた。この不幸を乗り切る為に、先祖墓地の整理をして供養もした。氏神に大きい鳥居も寄

附し、やる事は全部やった。唯今になって何回も生死を生きて来た、現在生きていることが幸かと思う。国防の第一線に立った者として、戦死、戦病死された方々、大戦に参戦した兵士に対して終戦七十年期をもって、国も国民も考え直す時期であると思う。戦死、戦病死された家族には扶助料が下されていますが、該当する父母、妻、子供も少なくなりました。扶助料が支給されない家庭に対して現在は、特別弔慰金が年四万円支給されています。戦場に立った兵士に対しては七十年間に総理大臣の感謝状と銀杯に十万円です。負けたと言いますが、大戦に参加した生存者も皆九十歳以上です。私たちの子供の頃は一ドル三百六十円でした。円安となったと言うが、現在百十七円ではだけ経済大国となった。現在の状況から見て当時は国民の義務であったが戦死、戦病死された家族、戦場に立った兵士に対して終戦七十年を期して国も国民も考えなくてはならないと思います。

父母に誓う平和よ寒昂

みどり市遺族の会笠懸支部 高橋 靖代

戦没者 高橋大治の子

私の父は昭和十九年十月二十日、ビルマの国モーライク県イングンギという所で亡くなつたと母から聞かされていました。母は実家の商家を手伝い私を育ててくれました。大勢の家族に囲まれてあまり寂しさを感じ無いで育つて来ました。中学生の時、桐生市の遺族会青年部で群馬県の護国神社に二泊で巫女さんの見習い奉仕をさせて頂きました。そこで遺児の人達と出会い、父の事について話すことになりましたが、私には父の記憶がなく他の人の話を聞くことしか出来ませんでした。

高校を卒業し、結婚し、子供も三人授かつて、今は皆成人して、孫にも恵まれ生活しています。そんな時母の忙しさや無常を思い私を大切にしてくれた日々感謝しています。

戦後七十年、私たちは戦争の無い平和な日本の国を望み、世界中が戦いの無い国でありますようお願いしてやみ

ません。

寒
昂
・
・
・
注
1 3

汽車を追いかけた母

みどり市遺族の会笠懸支部 石坂 勉

戦没者 石坂進の子

私は父親、母親の記憶は全くない。

昭和二十年三月二十五日父親は三十四才にて戦死、同年八月十九日母親病死したからだ。でも私は生きて来た。

母も過去三回の赤紙に対しては取り乱す事なく見送ったと言う。だが、四回目の召集に関しては取り乱し、幼い私を背負い父の乗った汽車を追いかけて行つたと聞いている。

入隊は高崎連隊^{注14}。皆様が面会に行つたと聞く。何も知らない私は幸いにも祖父母が健在で育てられて行つた。だが、成長につれ何かが気付いていく。昔は結婚式も各家で行っていた。何故俺は三三九度が出来ないのか。親が居ないからだと知らされた。

やがて祖父母も他界し、姉との生活が始まった。辛く苦しい事があれば親の眠る墓で一人夕暮れまでそばにいた事も何度となくあった。すると姉がお墓だろうと迎えに来た。

でも現在まで生きて来た。思い出せば父の遺品も数知れずあった。子供の頃何も知れずおもちゃとして遊んでいたが、祖父母は私を叱る事はなかった。今残っている物は生前授与されたと言う金鵒勲章^{注15}を含む七個の勲章のみだ。大切な物と聞いているので大事に持つて行こうと考えている。全てが第三者より聞いた話であるが、今後も姉と共に親の分まで長生きして行こうと思います。

「母の苦勞」

みどり市遺族の会大間々支部 今泉 眞澄

戦没者 今泉次郎の子

父が戦死したのは、昭和十八年一月五日、東部ニューギニア方面である。その時母は二十七才で子供は三人である。これからこの子達を一人で育てていかなければという思いと、何がなんでも切りぬけていかななくてはという母の思いは、如何ばかりと察して余りある。職業軍人^{注16}の妻として何一つ不自由ない生活をしていたのから一変して今後は一人で三人の子供を食べさせていかななくてはいけない立場になってしまった。

昭和十九年に伯父の世話で母は実家に戻った。物置を少し改造して住めるようにし、畳八畳ぐらいの部屋での生活が始まった。母はこれという定職がなかったが、昭和二十二年知人の紹介で中学校教諭の話があり、教師の道へと進む事となった。これから母の生活は教師になる資格を取得するため勤めをしながら大学の通信教育を受けた。夏休みには大学へ行って授業を受けて試験を受けるという毎日が二年間続いた。弟が小学校に入

る頃には生活は幾分落ち着いてきたが、そこに至るまでの毎日は食事も満足にとれず、おかわりしたくても釜は空、母の口には入らない日もあった。それでも幸い一家は健康に恵まれ、大病をすることなく生活をするこ
とができた。

戦争という大きな渦の中に巻きこまれ、今迄の幸せな生活を一変させられ、どん底に突き落とされてしまつた戦争は憎らしい！終戦後何年もの間、もしかして父は帰って来るんじゃないかと待ち続けたが、しかし遂に帰ってこなかった。子供の頃は父親の居る家庭を見ると羨ましかったが、母はそんなことを思つてか相撲の相手や時にはキャッチボールの相手もしてくれた。戦争の事が忘れ去られようとしている昨今、もう一度歴史を振り返ってみよう。

母が戦地から届いた父からの手紙の内容を詠んだうたに「子等頼む 子等頼むとのみ軍事郵便 人に見せざる涙幾歳」二度と戦争はしてはならない。戦後七十年いつまでも平和な日本であることを願いつつ筆を擱きま
す。

私と戦争

みどり市遺族の会笠懸支部 池崎 悦夫

戦没者 岩崎宗作の弟

戦後、農村地帯における現状の姿と対応は決して容易ではなかった。戦時中、戦後は労働力不足で何かと、不便を感じた。

家族の中でも兵役に出役する者、また高齢者のため、農作業に従事する者が少なく容易に作業が捗らず苦勞の連続を強いられる家庭も少なくはなかった。

そのため、小学校の五六年生が農家に勤勞奉仕^{注17}のため授業を休んで奉仕活動する姿は、随所に見られた。

農家の人手不足は、戦中戦後を通じ、しばらく続いた。

戦後の不安定な農家の姿は、間もなく明るい見通しが付き、軌道に乗り、平常に戻ったのは数年かかった。

世間の人手不足、物資の不安定な需要供給も数年して安定的な状況になり、各家庭もようやく明るい生活を

取り戻した。

しかし、物資の自由な供給はしばらく得られなかった。

物価は高く、実質的な内容は満足するものではなかった。

このような時代は、しばらく続き、数年、満足な生活は得られなかった。

このような不自由な生活は国民全体が好むと好まざると関わらず、体験をせざるをえなかった。

ようやく、このような状況から脱したのは十年前後を要した。

父さんと呼べずに過ぎた七十年

みどり市遺族の会笠懸支部 川島 清美

戦没者 川島福次郎の子

私は昭和十八年二月二十四日に生まれました。おじいさんとおばあさんに可愛がられ、元気に育ちました。戦争の悲惨さは現実にはあまりわかりませんが、ある時から父はいなく母もいなくなっていた。

中学校を卒業して桐生の織屋^{注18}さんへ就職して以来ずっと繊維関係の仕事をしていました。結婚もして家族四人社会の一人として色々な方々のお世話になり、五十五年が過ぎました。

遺族会の全国の募集で、遺族の子供だけの墓参の企画がありましたので、父さんの戦死した場所のグアム・サイパン・テニアン方面のコースに参加しました。全国から父さんを亡くした人達のみので行事でした。私はサイパン行の皆さんと一緒に海の浜や山の中で墓参をして廻りました。

日本の平和記念の塔での式典をして始めて、サイパンで、この海で父さんは死んだんだと思い、皆さん一人

一人が作文を持ち読み涙して何ヶ所か廻りました。

サイパンの病院には車いすを上げて来て記念植樹もして来ました。皆さんの想いが一緒の方々ですので夜の懇親会も盛り上がりました。

自分が七十一才になった今、日本は平和に生きていますが、世界では色々な国同士で戦いが終わりません。国の為に戦ってきた先人達に感謝をして今の日本の平和を皆さんで守って行きましょう。

悲しみはいくつになっても消えませんが、家族、子供達だけでも一人一人が話しをして引きついで行っても
らせる様に祈っています。

「サイパンの海青し群馬の赤城の空青しバンザイクリフ^{注19}の悲しみ消えずも空青し」

終戦七十年を迎えて思うこと

みどり市遺族の会大間々支部 今泉 清

戦没者 今泉喜一郎の子

終戦から七十年を迎える年に遺族会会員として記念誌を発行して頂けるよう提案したところ、石原市長、関係者のご理解により発行していただく事に対して心より感謝申し上げます。

私は大間々町八区に在籍しております。昭和二十年終戦時の世帯は百戸以下の集落において戦死者二十名と痛ましい状況でした。当時農業経営戸数八十%以上、二十代、三十代の働き盛り農作業の柱を亡くした家族の苦しみは想像を絶する状況の中から活路を見出し、現在の生活を切り開いてきました。終戦後七十年を経過するのに戦争のことをほとんど知らないことに気づいた。自分の父親が戦死しているのにあまり関心を示さなかった。なぜかふり返ると六歳から二人目の父親をもつことが出来た。父は心から自分の子供として認め、分け隔てなく育ててくれた。自分は感謝の気持ちで一杯です。このような環境から

戦死の話に触れなくなかった。退職後に遺族会の役員を受けて靖国神社を参拝した際に神殿の中で顔も知らない父親に会えた気持ちになり、涙がほと走りしばらく止まりませんでした。参拝を済ませるとほと靖かになったことを経験しました。その後、群馬県遺族の会主催二十四年度海外戦跡・慰霊巡拝事業、東部ニューギニア戦跡慰霊巡拝団に参加。平成二十四年十一月十日から十四日（参加費用群馬県1／3、みどり市1／3、個人負担1／3と公費を多額に助成していただきました。深く感謝いたします。）父親は、昭和十八年三月三日午前八時ニューブリテン島、ニューギニア島間ダンピール海峡海上に於いて戦死の公報が入っています。この海戦はのちに太平洋戦跡紀行の本の中にダンピール海峡の悲劇^{注20}と報道されている。この資料から、一万人の将兵を七隻の輸送船、駆逐艦、水雷隊に護衛されラバウルから出航三月二日から三月三日ダンピール海峡を通過する時点に連合軍百二十機が爆撃を加え七隻が沈没して護衛艦も甚大な損害をこうむる。将兵六千六百名が戦死。救助された将兵も後日の戦闘に於いて戦死している。大戦中、ニューギニアで十二万八千名が戦死。この多くの遺骨は現在も日本に戻れない状況とききます。この戦死者の半数以上が食糧補給が出来ず餓死、ワニ、毒蛇、毒虫、マラリア、河川を渡河する時溺死等の地獄絵

とききます。この様に悲惨な戦況の地に慰霊巡拝で現地国際空港に入国。赤道直下暑い、空港の中で現地人の他に欧米人、アジア系、観光客と思われる人はほとんどいない。異様な雰囲気。靴を履く人半数。万年草履、裸足これにはビックリ。国内線に乗り換え、マダンに於いて、旧日本軍の飛行機「吞龍」の残骸を確認全員が涙する。また、国内線でウエワクの平和公園で合同慰霊祭開催。同行した群馬県副知事関係者参列、しめやかに執り行われた。二度と戦争のない平和で住みやすい日本を維持することを誓いニューギニアの地に於いて慰霊できたこと、関係した方々に深く感謝申し上げます。

現在の日本社会において、対戦中に死亡した三百万人以上の将兵及び民間人の犠牲を払ったこの礎の上に現在繁栄した日本が築かれていることを忘れてはいけない。遺族の会の会員も高齢化が進む現在、七十年を省みる記念誌の作成に関係する皆様に心から感謝申し上げます。私もこれから戦死した父親のやり残した夢を引き継ぎ、少しでも世の中の役に立てることを誓い終戦七十年の回想とします。



旧日本軍重爆撃機「呑龍」の残骸前にて



マダンにある野戦病院跡記念碑に献花



ウエワク郊外のボーキン・ブーツ方面へ慰霊巡拝

想ひ出

みどり市遺族の会笠懸支部 大澤 三郎

戦没者 大澤伸次郎の義弟

大正十五年二月二十日生まれで今少しで満八十九才です。生まれてより昭和二十年八月十五日迄、軍國主義^{注1}政治に反対等出来なかった。私達友人の多く戦地に送られ、二度と故郷へ還ることは出来なかった。最近良く夢を見ることが多くなった。一年間の軍隊生活。若い青春時代の想ひ出の数々、多くの友人の夢を見るのも自由だ。これからも生きて居る限り夢を見つづけたいと思っている。これが私にあたえてくれた自由であると信じている。

青春時代を国のため、戦陣に散った友人達とも夢を見たいと想っている今日此の頃である。そして、夢でなく地球上から戦争の無い平和が続く事を願っております。

ビルマで戦死した兄、一夫

みどり市遺族の会東支部 毛塚 庫二

戦没者 毛塚一夫の弟

私の兄は毛塚一夫といいます。八人兄弟の長男でしたが、昭和二十年三月、イギリス軍の機銃掃射^{注22}により、ビルマ（現在のミャンマー）のモールメンで二十五歳の若さで戦死しました。

兄は、東京府大泉師範学校（現在の東京学芸大学）を卒業し、師範学校付属中学校の教師となりました。昭和十七年に召集され、教師だったこともあり、配属された高崎十五連隊で初年兵の教育をしていました。

その後、ビルマに航空司令部ができると、兄は志願して通信兵になったのです。当時、海外に赴任する際は一泊で家族に会いに行くことができ、昭和十八年に東村（当時）に帰ってきました。一泊していよいよ戻る際、兄がこう言ったんです。「俺はお国のために死に行く。庫二、おまえも後に続け。俺に会いたくなったら、靖国神社に來い」

今も、そのとき玄関先に立っていた兵隊姿の兄を思い出し、涙が出てきてしまいます。ずっと高崎にいれば、死なずに済んでいたはずです。家は次男の私が継ぎましたが、兄貴がいればな、と思うこともあります。

家族で安否を心配していた昭和二十一年、兄の部下だった高知県出身の兵隊さんが、自宅に帰るより前に我が家を訪ねて来ました。戦後引き上げの際に、胴巻きに兄の手と足の骨を一本ずつ入れて、持ち帰ってくれたのです。そのおかげで、兄の墓にはお骨があり、私たちは戦地の様子を知ることができました。

父は、遺骨を見ても兄の死を信じたくなかったのだと思います。しかし、その一年後くらいに戦死の公報が届くと「こんなものがあると、一夫が頭から離れない」と言っ、兄の写真や遺品を全部燃やしてしまったのです。そして、半年くらい口を聞きませんでした。母は、気丈に「(兄の)代わりはいくらでもいらい」と言っていたけれど、強がっていたんでしょう。

あの戦争は間違いだった、という人がいますが、戦争がなかったら、今の私たちの生活はありません。兄の死は、たった一人の死かも知れませんが、日本の礎になったと思っています。

私は、兄がビルマに行ってから猛勉強して海軍飛行予科練習生^{注23}に合格し、昭和二十年九月に出征するは

ずが、八月十五日に終戦となり、かないませんでした。戦後は公務員として働きましたが、お国のためと言った、兄に従ったつもりです。

（広報みどり 平成二十七年 四月号 掲載）

戦争を繰り返さないで

みどり市遺族の会笠懸支部 阿部 和子

戦没者 遊佐隼人の子

私が三歳の時、父はガダルカナルにて戦死し、面影や思い出は何もありません。

私も広島や沖縄の戦禍を見てきましたが、その悲惨な状況を二度と繰り返してはならないと思いました。私たちの家族のように一家ばらばらになってしまいます。

戦後七十年の節目となりそのようなことは二度とあってはならないと願って止みません。

七十年の回顧

みどり市遺族の会笠懸支部 本間 岑太郎

戦没者 本間安次郎の子

私は昭和十九年六月新田郡笠懸村の農家に生まれ、大東亜戦争の真っ只中でした。

父は昭和二十年八月四日、フィリピン、ルソン島で戦死、小学二年生の時、頭の中で浮かぶものは、両親のいる家庭と違うことで、父さんと呼ぶことができなかった。それは父親の戦死でした。なぜ父が戦死なのか、月日が流れ過ぎていくたびに、始めは肌で感じなかった父への想いが急速に表れ、いつかは、戦没地に行って、慰霊をしたいと願っていました。しかし比島は海外であり、食べていくのが精一杯の時代に、夢のような考えだったのかも知れません。いつかはきっと、この夢は忘れてはいけないと自分に言い聞かせ、年月と時間が長いようで短いような気がしました。時は流れ、昭和三十年代には日本の経済もゆるやかに、高度成長期に入り、今まで食べる生活から、物を買う関心に移りました。私たち家族も少しずつ生活にゆとりが出来るようになり

ました。現金収入を得るために私は会社員として働き、出勤前に畑仕事、帰れば畑仕事、休日は畑仕事、あまり休む時間がありませんでした。会社と農業の両立は難しく三十代まで畑を耕し、その後、畑は知人の農家へ貸しました。私も苦痛の長い人生を歩いてきたが、これからは会社勤め一筋にでき、身体が楽になり人並みの生活が出来、趣味も持つことが出来た。長年の苦労が一気に消えた気持ちになり父の墓の前で、生活が楽になった話を語ることが出来た。写真を見るたびに、父は私にとって永遠に若さが変わることはないだろう。歳月が過ぎるのは早いもので気がつくと五十九歳になっていました。会社員の私は定年を前に両親が残した畑を守るために、今から農業は出来ず土地活用として、農業とは別にアパート、マンション、駐車場経営に転換し、近所では畑を手放していく中、私は土地を両親が残してくれた時と変わらず残すことが出来、これも私の最低限の両親への親孝行かなと思っている。

定年後は苦労した身体を休め、少し残してある畑を無理せず耕し、その他、趣味に時間を過ごすことが出来るようになった時は、すでに六十歳を過ぎてしまいました。

平成十七年十一月群馬県遺族の会主催フィリピン慰霊巡拝、団員として参加し、初めて比島の土を踏むこと

が出来た。戦後六十年にあたり節目の年でもあった。長年の願いが叶い感慨深いものがある。

平成十八年十一月日本遺族会主催フィリピン慰霊巡拝、団員として参加し、父が戦死したフィリピンルソン島カガン州クマオ上流部にて戦後六十一年の長い歳月がたち、やっと夢が叶って祭壇の前で、父親に供養が出来、現在の家族の報告が出来たことで胸の支えが取れました。帰りに草の種一個、石を三個持ち帰り、一個は墓地に、一個は仏壇に、一個は靖国神社へ、以後、比島へは三回、慰霊巡拝に参加してまいりました。

又、この戦争を考える時、我が日本国は建国以来初めての敗戦を経験した。憂いの兵士は各立場で参戦し、応戦し、報恩のためとは言え戦死し、残された遺児、遺族の苦しみは言葉でたとえ様ありません。

日本は平和で豊かな国の中で戦争の悲惨さを忘れてはいけません。



念願だった父の戦没地での供養を終えて

戦争中の思いで

みどり市遺族の会東支部 根岸 英二

戦没者 根岸章の弟

私は昭和十八年四月、十九才のとき今迄勤めていた宇都宮から東京池袋の学校に二年間入学することになりました。全寮制で一部屋十二名、全国より集まった若い人達と楽しく生活することが出来ました。ある時、物理の時間に原子爆弾^{注24}の講義を聞くことができました。当時原子だ原子核だなんてことはほとんど知らなかった私には正に青天のへきれきでした。ウラニウムの原子核を分裂させるとものすごい爆発力と高温が発生し、総ての物を破壊し、焼きつくしてしまうと云うのです。更に最も悪いのは放射能の発生です。これに直接触れると直ちに死亡するが、少し触れただけでも何年か後には死亡すると云うのです。しかも広範囲に広がり五十年以上も効力があり、人が住むことが出来ないとの事でした。この爆弾を早く使った方が此の戦争に勝てるのだと云われました。当時は半信半疑でしたが、深く頭の中に入って居りました。実際、二年後に広島に投下さ

れ、その被害状況を聞いて全くその通りだった事に改めて感心しました。

当時戦況もそれ程の動きもなく割合静かでしたが、何せ若い者のお腹の方は寮の食事では足りません。幸いお金の方は給料を貰ったので夕食後は街へ出て、営業している食堂を探しては空腹をしのいでいました。

秋には学徒出陣^{注5}がありました。私も今迄徴兵検査^{注6}が猶予されて居りましたが、今度学生全員が検査を受けることになったのです。幸い私は理工系だったので卒業まで入隊の方は猶予されましたが、文科系の方は直ちに出征することになったのです。戦後、知覧^{注7}の特攻隊記念館を見学しましたが、大部分の方が大学の卒業生でした。多分あの時、学徒出陣で出征した方達だと思い、感謝の気持ちで一杯でした。

十九年に入りますと戦況がだんだん厳しくなり、疎開が始まり学校の方も勤労奉仕が多くなり、新宿繁華街建物の取り壊しや吾妻線の鉄道建設などにかり出されました。

ここで一寸兄の事にふれさせて貰います。兄は海軍に入隊し、海軍通信学校を経て戦争直前に航空母艦赤城に通信兵として乗り込みました。ミッドウエー海戦で艦を失い、同じ航空母艦翔鶴に乗り込み、十九年六月十

九日サイパン島沖で潜水艦の魚雷攻撃で沈没。帰らぬ人となりました。戦後、赤城については本などに書いてありましたが、翔鶴については読んだことがありません。

二十年の一月から三月にかけて勤労奉仕で広島に行って居りました。当時広島は割合のんびりしていて戦争をしているという気分は余り感じられませんでした。一度艦載機が飛来しましたが、被害はありませんでした。ここが四ヶ月後にあの片時も忘れなかった原子爆弾の被害にあうなど全く考えられませんでした。三月末に広島を引き上げ、卒業後は新しく浜離宮近くの職場に移り、中野の寮から通勤し、ほとんど職場の疎開の仕事をして居りました。たしか四月十二、三日頃だったと思いますが、宿直の夜初めて本格的な空襲にあいました。B29が編隊を組んで何の抵抗も受けず、低空で整然と都心に向かって進入して行く姿を見て、呆然と見送って居りました。幸い近くには被害もなく翌日には電車も動いていたのでほっとしました。

五月中旬になって六月一日に宇都宮の砲兵隊に入るよう通知が来しました。五月二十五日に帰ることに決め、二十四日の晩、仲間と送別会を開いていた所、突然空襲警報が鳴り其のうちだんだん外が騒がしくなったので、外へ出て見たらもう近くまで火の海でした。あわてて皆を外に出し、上を見上げていたら、焼夷弾^{注8}が落ち

て来るのがはっきりわかるのです。火の光に映し出され、風を切ってひゅうひゅうと音をたてながら斜めにゆっくり落ちて来るのです。速度も遅く方向もはっきりしているので、見ても少しも恐ろしいとは感じられませんでした。そのうち自分達の寮の近くに二十発ほどの焼夷弾が地面でプスンプスンと音をたてて落ちてきました。見る見る家は火の海に変わり、其の炎たるやまるで台風なみの風に煽られて地面を這うように横に走っているのです。其の物凄い光景は今でも忘れることが出来ません。でもそれが最後で以降焼夷弾は落ちず、近くの民家は助かりました。私達は帰る所もなく、中野駅のホームで一夜を明かしました。翌朝皆に送られ帰途につきましたが、電車が全然通らず仕方なしに中野駅から新宿駅と電車道を通って、池袋駅まで来ました。幸い私鉄が動いていたのでそれに乗り何度か乗りついで、その日の夕方、群馬の実家にたどり着きました。

六月一日無事に入隊し、砲の操縦や乗馬の訓練が続きましたが、宇都宮の空襲後はその跡片づけや農家の手伝いなど別の業務も増える中、終戦を迎えました。其の後八月末に元の職場にもどり、平穏な暮らしに戻ることが出来ました。

改めて考えてみますと長い人生の中であの戦時中の数年間が最も思い出の多い時でもありました。

現在私は九十一才になりましたが、妻と二人で少し広すぎる位の畠で野生動物の被害にあいながら野菜などを作ってのんびり暮らして居ります。

私と戦争（兄を悼む）

みどり市遺族の会笠懸支部 関口 定夫

戦没者 関口神一の弟

昭和十九年、「国民学校」^{注29}へ入学した私は二年生の夏休みまで軍国教育の最後、破れかぶれのそれをうけてすごした。

玉音放送^{注30}の中身は解らなかった。戦争に負けたこと、無条件降伏^{注31}であることを教えられた。皆泣いていたが、男たちはほつとしたような顔も見せた。「もう空襲は無いんだ」という声も聞こえた。翌日米軍機が飛んできたが、念のための警戒警報は出されたように思う。

夏休みが終わり、二学期の登校を始めた様子は記憶が無い。兄神一が死んだのは、昭和十九年六月十八日、となっている。

二十年の秋か冬か、戦没者の「村葬」というのが営まれた。祭壇に白布に包まれた箱が沢山並んでいた。

参列者の中に、くらちゃんという同じクラスの女の子がいた。父親を亡くしたんだと思ったが確かめても見なかった。私は兄の村葬と届け出ていたので、公休扱いだったが、「疎開者」で内気なくらちゃんは届けていなかったようで欠席扱いになってしまった。私から先生にひと言「くらちゃんも村葬だったんです。」と伝えるべきだったのに、と七十年経ったいまでも、少し胸が痛む。

兄「神一」はインパール作戦^{注2}で戦死した。どのように死んだのかは知るよしもなかったが、それだけに父とすれば、次男である私より十六も年上の長男を亡くしたことは容易に信じられるものではなく、当時父の従兄でもあり、兄の間接的な上官でもあった田村さんから「神一が怪我をした」（後に田村さんも戦死、元笠懸会長田村和万さんの父）という手紙が届いたとき、発信日と戦死公報の時期の矛盾などを自分の知識だけで分析し、「矛盾がある」などと、戦死そのものを「間違いだ」と無理に思い込もうとしていた時期があった。

その後三十年以上経ったとき偶然、近所へ越してきた人のつてで、兄と同じ部隊にいて復員してきた人がいる事がわかり、両親が訪ね歩いたが、それらの人々から、決定的な話を聞かされ、確信せざるを得なくなった。父もすでに晩年と言われる頃であった。

◇ビルマ戦記に小さき活字で載れる名は兄のことよと父震へ指す

昭和六十三年作

六十一年に死んだ父の晩年の一場面である。公式の記録ではないが、元連隊の有志の方々の編纂^{注33}と思われる。「戦記」に残されていた「関口兵長が斥候^{注34}に出て銃弾を受けて戻ってきた。」という記述は父が万が一の期待を踏みにじるものであったが、一方、仮にも戦闘の一端で命を落とした、という安堵のようなものもたらした。撤退しながら、雨季の濁流に命を落とした人も少なくない、とも聞いたせいだろう。

◇苔生ふる兄の墓石に残れるは若かりし父の平和への希ひ

昭和六十三年作

◇「新生日本の礎石」となりし兄なりき碑文は亡父^{ちち}の労作にして

平成十四年作

この六十三年頃、一緒にビルマで戦ったという人が数人、墓参に寄ってくれた。

◇生き居ればかく老いしかと兄想ふ墓参に寄りし戦友の貌々

◇童顔さへ宿す遺影に白髪が吐くごとく語る歴戦の日々

◇遠去りし修羅の日を言ふ老勇ら戦争ごっこを語るにも似て

◇九死に一生得し者ばかり夫々に弾痕^{たま}負ひて四十年経しとふ

◇兵幾人死地に征かせし老将の戦後は墓参に明ける暮るといふ

◇模範兵とはまっ先駆けて死ぬ画家と兄の遺影に塗布破産なり

父の死後遺族会の会員は母が継ぎ、母に代わって私が地域の役なども受けて、靖国神社や護国神社へお参りする機会がふえた。

（以下短歌は制作年次不順）

◇靖国に兄のお在すと信ずるにあらねど礼は深々となす

◇み社の奥なる鏡も心なし花映ゆるなり英霊^{たま}安らかめ

◇夫^せを征かせしも父逝かせしも老いづきて拝殿埋むるなべて白髪

そしてその後旅行の折や何かにつけて兄が戦死に託した思いなどを考える。

◇かくの如き密林に兄は斃^{たお}れしかマングローブ林の奥処暗々

沖縄西表島にて

◇兄逝きしビルマの方を示す碑に今更の涙こらへ対^むきををり

沖縄摩文仁の丘にて

決して巧くない短歌などを並べて、気持ち語るなどおこがましいが、それでも何も無い行間を読み取っていただけるとありがたい。兄はごく普通の農家の跡取りである筈だった。

◇イムパールの土供ふれば兄顕^たてり若きままなる草刈りの姿

昭和六十三年作

軍国教育真っ只中で一年坊主になった私も、死ぬことの意味も知らず、歌でも歌うように名誉の戦死を決意していた。

◇戦ひに死ぬると決めし幼な日はあまりに遠し靖国桜花ざかり

いたずらに紙数を弄した。最後に旧作で恐縮だが、私の戦争感の一端を詠み、すべての戦没者へのねぎらいの言葉としたい。

◇悪しき国攻むるを侵略とはいはず悪を揚ぐる国もまた無く

平成十五年作

短歌は古めかしい言葉使いで読みにくいですが、どうかご容赦の上ご判読下さい。

「父よ、母よ」

みどり市遺族の会大間々支部 二渡 努

戦没者 二渡嘉雄の子

一、「ここはお国を何百里、離れて遠き・・・、父よ、あなたは強かった・・・」

終戦から七十年の歳月が経っても、未だ知らず知らずのうちに軍歌の一節が口から溢れ出てきて、涙が止まらなくなる時がある。朝起きて、仏間の母と父の遺影に「おはようございます」と語りかける時、二人は何も言ってくれない・・・。

我が家の門を入った左手に、母が父の名をつけて呼んだ「嘉雄さんのバラ」が年に何回か可憐な花をつけ、心を和ましてくれている。屋敷の中で昔の面影を残しているのは古い大きな門と二つの蔵、西には戦争中に周りの繊維を削り切りとられて赤裸同然の姿で天空に聳える棕櫚、北にはお稲荷様が二つあり、檜やケヤキの大木があったと思われる穴のあいた根っこがその存在感を示している。お稲荷様の大木の下、祖母に背負われて

見た、前橋が空襲でやけている赤々とした西の空の有様は、鮮明に記憶に残っている。しかし、母から聞いた、高崎十五連隊に父に面会に行ったという記憶は残念ながら残っていない。

二、平成二十二年八月二十一日（金）～八月二十九日（土）

西部ニューギニア慰霊友好親善訪問の記録

（追悼の言葉）

お父さんへ

群馬県

二渡 努

二つ下の弟が妻ちかの腹の中にいる時にあなたは出征し、北支から南の島のニューギニアに渡り、ムミにおいて、昭和二十年二月十六日に亡くなりました。その六ヶ月後の八月十五日に大東亜戦争は終了しました。妻や二人の子供、努と、求、そして母すみのことを異国の地で思い、マラリアに罹り、生きて日本の土を踏むことができないことを知った時のその無念の思いはいかばかりであったか、想像することが出来ません。あなたの帰還を待ちわびていた家族にとって、悲しい知らせを受け取ることは、実に耐え難いことでした。

敗戦の混乱した日本、農地改革が断行され、食料の供出などが実施されました。それまでお姫様のように育てられたあなたが智恵子と呼んでいた妻の生活は一変しました。二人の幼子を抱え、生きるために男と同じよ

うに農作業に精を出し、男達に混じって、墓堀作業などもこなし、二人の息子を育てながら、二渡の家を守ってきました。高津戸の婦人会長、大間々町の遺族の会の初代婦人部長などを歴任し、地域社会に貢献してきました。世間に対して、恥をかかぬように、父がいらないからといって、後ろ指を指されぬように、何時も気を使っている母は強い人でした。これもお父さんが天のどこかで見守ってくれている事を信じて、それを支えに、歯を食いしばって、必死に生きてきてのだと思います。

その母も二〇〇五年四月九日に八十八歳で天に召されました。母がお父さんの名前をつけた『嘉雄さんのバラ』が門を入ったすぐの所で、毎年何回か可憐な花をつけて、私達家族を見守ってくれています。

お父さんが亡くなった、このニューギニアの地に、六十四年後にやっと来ることが出来ました。お父さん、家の田んぼのお米です。皆で作ったおりづるです。お父さん、安らかにお眠りください。・・・最後に、「九段の桜」を吟じますので、聞いてください。 八月二十五日 マロニにて

三、父の戦死の知らせが届いて、しばらくして、祖父が亡くなり、続いて祖母もあの世に召され、二人の子供を抱え、母の苦難の歩みが始まりました。初めての農作業の日々、田植えの時には六キロ離れた岩宿からは

実家の父たちが、牛を引いて助けに来てくれました。農地解放で多くの田畑を失い、残った土地で日本人の食料供給のため、強制的に米やさつまいも「おきなわ」の供出ノルマをこなさねばなりませんでした。現金収入は殆ど無いなかで、残った山林からの恵みで、かろうじて生活が成り立っていたようです。今思うと信じられないようですが、マキにする立ち木や肥やしに利用する木の葉を買ってくれる人がいて、雑木・木の葉に私は育ててもらったともいえるようです。母の農作業なども近くの人達の協力なしにはなりたちませんでした。屋敷の一棟に岩澤とよさん一家が住んでいて、母の良き相談相手に、精神的な支えになっていたことなど、いろんな事がありました・・・。

父よ母よ・・・過去の出来事が走馬灯のように駆け巡っています。

四、遺族会ってなんだろうと思うことがあります。私が遺族の会壮年部の副部長の時、碑の作製に絡んで、女性会員の方が退会を余儀なくされたことがあり、会員一人を救えない遺族の会の意味を考えました。（このとき、現場に居合わせなかったのですが）

二度と戦争のようなことを起こしてはならない。しかし、現実には、世界各地で血なまぐさい憎悪と憎悪の

ぶつかりあいがあり、人の命が軽んじられています。遺族の会の進むべき道はなんなのでしょうか。

最後に疑問に思うことは、英霊の顕彰は必要です。日本の礎となって散った英霊に尊崇の念を抱いています。が、英霊の妻たちあつての、戦争遺児です。その妻たちの顕彰、冥福が遺族会の行事の中で、語られることはありませんでした。これでいいのでしょうか。

兄の思い出

みどり市遺族の会笠懸支部 大矢 正

戦没者 大矢榮二郎の弟

戦後七十周年記念誌作成のための原稿の依頼が遺族会の方からありましたので、戦死した兄のことを思い出して書いてみたいと思います。

私と戦死した兄とは七つ違いで、小さい時に兄の友達の家には柿を貰いに行ったことや、西の川に釣りに行ったことなどを思い出します。

戦死した兄は次男で、高等二年が終わると直ぐに横浜鶴見の親戚の家に下宿して、昼は会社に勤め、夜は学校の夜間部で勉強していたのだそうですが、戦争も激しくなってきた、一年でも早く兵役に付けば早く帰ってきて親孝行ができると、志願して徴兵検査を受け、甲種合格^{注35}したと喜んでお呼びがかかるのを待っていたようです。

やがて召集がきて、東京赤羽の近衛工兵隊^{注 36}に入隊しました。入隊して間もなく、北支に派遣されることになり、父親と私の二人で赤羽の工兵隊に面会に行った時が、兄と話ができた最後の日だったのでした。

それから兄は、北支から輸送船で南方戦線に向かう途中で戦死したとのこと（フィリピン沖とのこと）で、戦死公報が届いた時の両親の涙した顔が今でも忘れられません。陸軍伍長・大矢榮二郎、昭和十九年四月二十
六日戦死。

私は親が亡くなった後も遺族会会員として靖国神社参拝や護国神社祭礼に参加させてもらいました。また、市で行ってくれる戦没者追悼式にも参加させてもらっています。それに遺族の家庭に国から弔慰金を頂いており感謝しております。

あの戦争の荒廃からこのように復活したのも、あの戦争で犠牲になった方の礎があったからだと思います。
戦後七十年の日本、住みよい国日本を望みます。

用語の解説

注	用 語	読 み	解 説
注 1	満州	まんしゅう	現在中華人民共和国において「中国東北部」と呼ばれる地域およびロシア連邦において「極東」と呼ばれる地域の一部を含めた北東アジアの特定地域を指す地域名。
注 2	軍事郵便	ぐんじゆうびん	戦地の軍人に宛てて自国から発送される、もしくは戦地から自国宛てに発送される郵便。
注 3	検閲済	けんえつずみ	狭義には国家等の公権力が、表現物（出版物等）や言論を検査し、国家が不都合と判断したものを取り締まる行為であり、許可のあるものに「検閲済」の印をした。
注 4	赤痢	せきり	細菌性赤痢。潜伏期 1～3 日で発症し全身の倦怠感、悪寒を伴う急激な発熱、水様性下痢を呈する病気。
注 5	叡智	えいち	すぐれた知恵。深く物事の道理に通じる才知。
注 6	大東亜戦争	だいとうあせんそう	第二次世界大戦の日本の関係した戦いを「太平洋戦争」と言い、更に日本側の指導者層による呼称を「大東亜戦争」と言う。東亜は東亜細亜（ひがしあじあ）。
注 7	秘密隊	ひみつたい	第二次世界大戦期の大日本帝国軍に存在し、特殊な訓練を受けてスパイ行為などを行った。
注 8	赤紙	あかがみ	軍隊に入る命令書。帝国陸海軍の召集のうち召集令状等はその色から赤紙などと呼ばれた。
注 9	陰膳	かげぜん	旅（この場合戦争）等の際、道中の飢えや無事を祈って留守宅に供える食事（膳）。
注 10	不可侵条約	ふかしんじょうやく	相互に相手国に対して侵略行為を行わないことを国際的に約束し、条約によって明文化したもの。
注 11	牡丹江	ぼたんこう	中国東北地区の吉林省・黒竜江省を流れる川。
注 12	農業簿記	のうぎょうぼき	農業特有の勘定科目等の簿記会計。
注 13	寒昴	かんすばる	俳句の季語。プレアデス星団のこと。季節：三冬
注 14	高崎連隊	たかさきれんたい	大日本帝国陸軍の歩兵連隊のひとつ。日清・日露戦争から、満州・上海両事変、日中戦争、太平洋戦争とほぼすべての戦役に参加。
注 15	金鵄勲章	きんしくんしょう	日本の旧叙勲制度において武功抜群とされた軍人軍属に与えられた勲章。
注 16	職業軍人	しょくぎょうぐんじん	軍隊所属で、尚且つ軍の業務を正式な職業とする者。
注 17	勤労奉仕	きんろうほう	公共の目的のために、無償で労力を提供すること。特に、

注	用 語	読 み	解 説
		し	第二次世界大戦に学生などに課せられた無償の労働。
注 18	織屋	おりや	機織り（はたおり）を職業とする家。また、その人。機屋（はたや）。
注 19	バンザイクリフ	ばんざいくりふ	北マリアナ諸島サイパン島北端にある岬。太平洋戦争中、サイパンの戦い（1944 年 6 月 15 日～同年 7 月 9 日）において、追い詰められた日本兵や民間人が海に身を投じて自決した悲劇の断崖。
注 20	ダンピール海峡の悲劇	だんぴーるか いきょうのひ げき	1943 年 3 月 2 日から 3 日にかけて、パプアニューギニア近隣のビスマルク海からダンピール海峡にかけての海域で、連合国軍が日本軍の輸送船団に対し航空攻撃を行ったことで戦闘が発生。この戦闘で日本軍の輸送船団は壊滅し、ダンピール海峡の悲劇と呼称された。
注 21	軍國主義	ぐんこくしゅ ぎ	軍事力を国家戦略的に重視し、政治体制・戦略・財政・経済体制・社会構造など総合的な国力を軍事力の増強のため集中的に投入する国家の体制や思考。
注 22	機銃掃射	きじゅうそう しゃ	機関銃等で敵をなぎ払うように射撃すること。
注 23	海軍飛行予科 練習生	かいぐんひこ うよかれんし ゅうせい	大日本帝国海軍における航空兵養成所訓練生。
注 24	原子爆弾	げんしばくだ ん	原爆と略称される。ウランなどの原子核分裂に伴って放出される巨大なエネルギーを利用した爆弾。1945 年（昭和 20 年）にアメリカ軍が広島と長崎に投下した。
注 25	学徒出陣	がくとしゅつ じん	第二次世界大戦終盤の 1943 年（昭和 18 年）に兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する 20 歳以上の文科系の学生を在学途中で徴兵し出征させたこと。
注 26	徴兵検査	ちょうへいけ んさ	合格した者を徴兵対象の候補者とするために、20 歳に達した男子が義務付けられた検査。身長・体重・病気の有無等が検査される。
注 27	知覧	ちらん	鹿児島県薩摩半島の南部中央にあった町。この地に置かれていた陸軍飛行場は、太平洋戦争末期に沖縄戦へ向けた特攻隊の出撃基地となった。
注 28	焼夷弾	しょういだん	火災や高熱によって人や建物等を殺傷・破壊する油脂爆弾。ナパーム弾。攻撃対象を焼き払うために使用された。
注 29	国民学校	こくみんがっ	1941（昭和 16）年の国民学校令に基づいて設立され、

注	用 語	読 み	解 説
		こう	それまでの尋常小学校、高等小学校、尋常高等小学校はすべて国民学校とされた。
注 30	玉音放送	ぎょくおんほうそう	天皇の声による放送。
注 31	無条件降伏	むじょうけんこうふく	軍隊または艦隊が兵員・武器一切を挙げて条件を付することなく敵の権力にゆだねること。
注 32	インパール作戦	いんぱーるさくせん	援蒋ルート of 遮断を戦略目的としてインド北東部の都市インパール攻略を目指した作戦。補給線を軽視した杜撰な作戦により、多くの犠牲を出して歴史的敗北を喫した。
注 33	編纂	へんさん	いろいろの材料を集め、整理・加筆などして書物にまとめること。
注 34	斥候	せっこう	本隊の移動に先駆けてその前衛に配置され、進行方向の状況を偵察しつつ敵を警戒する任務。
注 35	甲種合格	こうしゅごうかく	徴兵検査で、第一級の合格。
注 36	近衛工兵隊	このえこうへいたい	大日本帝国陸軍の師団の一つ。一般師団とは異なり、最古参の部隊（軍隊）として天皇と皇居を警衛する。

資料

みどり市の戦没者遺族援護事業

平成 18 年度

◎みどり市笠懸町戦没者追悼式の開催

日程 平成 18 年 10 月 26 日

会場 笠懸公民館（交流ホール）

◎みどり市大間々町戦没者慰霊祭の開催

日程 平成 18 年 11 月 2 日

会場 大間々忠霊塔前

◎みどり市東町戦没者慰霊祭の開催

日程 平成 18 年 11 月 7 日

会場 東町忠霊塔台地

◎第 40 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 19 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 19 年 10 月 25 日

会場 笠懸野文化ホール

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（1 名）

場所 中部太平洋地域（パラオ・マリアナ諸島）

◎第 41 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（1 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 20 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 20 年 9 月 25 日

会場 ながめ余興場

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（1 名）

場所：中国東北部（旧満州）・ロシア地域

◎第 42 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（1 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 21 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 21 年 11 月 5 日

会場 東運動公園社会体育館

◎第 43 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（1 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 22 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 22 年 9 月 29 日

会場 笠懸野文化ホール

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（2 名）

場所 フィリピン地域

◎第 44 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 23 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 23 年 9 月 29 日

会場 ながめ余興場

◎第 45 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 24 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 24 年 9 月 28 日

会場 東運動公園社会体育館

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（1 名）

場所 東部ニューギニア地域

◎第 46 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 25 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 25 年 10 月 4 日

会場 笠懸野文化ホール

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（1 名）

場所 ミャンマー（旧ビルマ）地域

◎第 47 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 26 年度

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 26 年 9 月 25 日

会場 ながめ余興場



毎年厳かに執り行われているみどり市戦没者追悼式

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（2 名）

場所 フィリピン地域

◎第 48 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）



「群馬の塔」は、沖縄と南方諸地域等で戦死された群馬県出身の戦没者の慰霊と世界平和を祈念し建立されている。台石の表面に、沖縄戦没者の遺族から送られた戦没者にとってゆかりの深い個々の霊石を配置してある。

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

平成 27 年度（予定）

◎みどり市戦没者追悼式の開催

日程 平成 27 年 9 月 29 日

会場 東運動公園社会体育館

◎海外戦跡慰霊巡拝者への助成（2 名）

場所 パラオ地域

◎第 49 回沖縄「群馬の塔」慰霊参拝者への助成（2 名）

◎戦没者遺族の相互交流事業（2 回）※みどり市社会福祉協議会への委託事業

戦後七十周年記念誌　－戦争の記憶と平和への祈り－

発　行　みどり市

〒379-2395　みどり市笠懸町鹿 2952 番地

電話　0277-76-2111（代表）

編　集　みどり市保健福祉部社会福祉課

みどり市遺族の会

2015 年 9 月発行